

知求会ニュース

2013年5月

第46号

◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

2012年4月8日(月曜日)午後3時から国際学部大会議室にて、2013年度オリエンテーションが開催されました。学長からの新入生へのメッセージは宇都宮大学 HP (アドレスは以下参照)に、掲載されています。

(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/topics/2013/04/000664.php>)

今年度の入学者は、国際社会研究専攻の第15期生 奥備一彦さん、小俣美樹さん、KAERJIA さん、國谷祐輔さん、胡 祥林さん、尚 宏偉さん、鄭 陽さん、NONG THI BICH さん、李 震さんの9名と国際文化研究専攻の第15期生 安 秋爽さん、尹 立さん、王 舫路さん、郭 文婕さん、洪 偉智さん、孫 飛さん、NYAMJAV DENSMAN さん、森川実咲さん、李 学梅さん、劉 陽さんの10名、そして、国際交流研究専攻の第10期生 植田 エレニセ 悦子 穂先さん、何 洋洋さん、金 双双さん、NGUYEN VIET QUYNH CHI さん、洪 璟さん、谷 莉莎さん、力田萌瑞さん、唐 碩さん、任 苗さん、萩原好子さん、方 潔さん、MYAGMARSUREN LKHAMSUREN さん、劉 禹君さんの13名で、計32名でした。

◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程に入学したスバゴジョエフ・アセリ(国際文化研究専攻・第13期生)さんと趙 無忌(国際文化研究専攻・第13期生)、進学おめでとうございます。今後の研究成果に期待したいと思います。(博士録19を参照)

◎ 教職員人事異動

湯本 浩之准教授

氏名(英文): 湯本浩之 (YUMOTO Hiroyuki)

専門: 開発教育・グローバル教育、参加型学習・アクティブラーニング。

前職: 立教大学文学部特任准教授

趣味: アウトドア (スキー・キャンプ・トレッキングなど)

自己紹介: 4月1日付けで留学生・国際交流センターに着任しました。過去20数年余り、NGOやNPOのスタッフ・役員として国際協力や開発教育に関わりながら、大学や大学院では、非常勤講師として、国際協力論やNGO/NPO論、国際教育論や国際ボランティア論などを担当してきました。直近の5年間は、立教大学でESD(持続可能な開発のための教育)論をはじめ、インターンシップや海外文化研修、キャリア教育や情報教育などを担当しました。研究テーマは、英国や大陸欧州における開発教育・グローバル教育の政策研究のほか、フレイレやチェンバースらの理論や実践を参考に、参加型学習と参加型開発との

比較研究を試みています。本学では、グローバル人材養成に関連して、国際キャリア開発プログラムや今年度から開講される"Learning+1"の科目を担当する予定です。私のこれまでの実践や実務の経験を生かすことができればと考えています。

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊(平成25年4月17日発行) x面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「市民に寄り添う報道を」の内容でまちびあセンター長・**安藤正知**さん(国際社会研究専攻・第4期生)の記事が掲載されました。

2. 放送大学栃木学習センター「とちの実」に、栃木学習センター前所長 **鯨井佑士**先生の「退任にあたって」の文章が掲載されました。

(<http://tochigi.sc.ouj.ac.jp/oshirase-3/2013/04/0404>)

◎ 宇都宮大学公開講座(地域連携教育研究センター主催) 有料

1. 韓国語講座

入門コース・初級コース・中級コース
上級コース

丁貴連先生(コーディネーター)

金多希(国際文化研究専攻・第8期生)

崔寶允(国際社会研究専攻・第9期生)

2. 女性作家の名作を楽しむ(夏期)(秋期)

小池清治国際学部名誉教授

3. 山本有三とドイツ文学

橋本孝国際学部名誉教授

4. 里山で楽しむランプリング 里山科学センター

平井雅世(コーディネーター)

(国際社会研究専攻・第4期生)

5. 栃木から貧困問題を考える

田巻松雄先生他5名

6. タイ料理入門 抽選

タイ料理研究家 **泉田スジンダ**先生

詳細は以下のHPをご覧ください。(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/cercc/index.html>)

○刊行案内

国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより4月上旬に、多文化公共圏センター年報第5号269頁が刊行されました。目次を以下に記します。(敬称略)

はじめに

高際澄雄

リレーエッセイ 「『伝統』から『革新』を読み解く」

内山雅生

I 特集：『メディア・教育・公共圏』

「多文化公共圏センターのこれまでの歩みを考える」

重田康博

「ドイツ・ロマン主義と『多文化共生』」

高橋 優

「理性の使用、偶然の可能性—授業報告に代えて」

田口卓臣

「ニューカマー系外国人学校の現状と課題」

田巻松雄

「東日本大震災後のスポーツ支援活動をめぐる新聞報道と公共圏の萌芽
—『連携』と『牽引』の公共圏形成—

中村祐司

「九鬼周造—『いき』の構造における『公共圏』」

渡邊直樹

II 福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト(FSP)

- 1 FSP2012 年度活動報告
- 2 FSP・国際開発学会「原発震災から再考する開発・発展のあり方」研究部会
合同報告会「栃木県北地域と『隠れた被災者』
—市民による除染と子どもの安全のための活動を事例として—」
- 3 FSP アンケート報告会&座談会
- 4 国際開発学会第13 回春季大会
- 5 国際開発学会での「原発震災から再考する開発・発展のあり方」研究部会の開催

III 活動報告

- 1 公開シンポジウム 「3.11 原発事故と国際学の未来」
- 2 日光研究プロジェクト2012 シンポジウム、スタディ・ツアー
「自然美と自然保護運動の近代日光
—文学者、自然保護主義者、アジア人旅行者の記録から読み解く—」
- 3 連続市民講座「多文化共生について考える」VOL.7
「ドイツ・ロマン主義文学と『多文化共生』」 講師 高橋 優
- 4 第4 回グローバル教育セミナー
「地域で世界につながるまちづくり
—国際協力・地域再生のために市民・大学生ができること—」
- 5 宇都宮大学生国際連携シンポジウム2012
「ベラルーシから学ぶ私たちの未来
—チェルノブイリ原発事故と福島原発事故を振り返る—」

IV 論文・報告等

投稿論文

- 「中国朝鮮族の出稼ぎによる留守児童生徒の実態調査報告
—中国延辺州龍井市の小中学校へのアンケート調査を中心に—」 金 英花
- 「カンボジアにおける土地私有化以前の土地制度
—ポル・ポト政権による土地所有・土地計画とその影響—」 サ・ソチア
- 「近隣社会の特性と存在意義についての考察
—地域コミュニティの基層としての近隣社会に着目して—」 館野治信
- 「再生可能・省エネルギーをめぐる日中間協力の課題
—技術移転を通じたNEDO 北京事務所等の取り組み—」 陳 懐宇
- 「日中両言語における数量表現の形式と意味の対応関係」 范 喜春
- 「日本語における『重言』およびその教育法」 方 小賛
- 「英国人の見た明治期の『日本』
—ラフカディオ・ハーンの特徴的な日本観と松江—」 三成清香

研究ノート

「タイの洪水が投げかけた課題について

ー在マレーシア日系企業と日本関係機関のアンケート調査からー

岡本義輝

視察報告

「スリランカのNGO・サルボダヤ運動を訪問して」

重田康博

陣内雄次

V 関連資料

- 1 センター組織と活動記録
- 2 センター年報発行要綱
- 3 新聞記事
 - ・「原発労働の実態注視を」
 - ・「県民は隠れた被災者」
 - ・「原発震災後 未来探る」
 - ・「ポルトガル語の中学教科単語帳」

研究室訪問 38 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第38回には国際文化交流研究講座所属の**高山道代**先生にお願いしました。

「研究室便り」

高山 道代

早いことに、赴任してから今年で7度目の春を迎えました。その間の邂逅に思いを馳せながら研究室紹介をしたいと思います。

赴任してはじめて迎えたゼミ学生は2005年度入学の3年生でした。初年度の演習では文学部よろしく江戸時代の文学作品をとりあげたところ、十数名いた学生が一人、二人と減っていきました。今になって考えると、国際学部の学生が古い時代の文学作品に興味を抱くことは珍しいことであると予想できそうにも思われるのですが、当時の私にはその余裕がなく、ずいぶんと心細く思ったものでした。しかし、あまり国際学部らしくない私の演習に残った数少ない学生たちは非常に熱心で、一人は文学作品に基づいた文法研究、もう一人は現代語の語彙の意味に興味をもち、二人とも4年次には立派な卒業論文を書きあげてくれました。このはじめのゼミ学生の二人は今でも鮮烈な記憶とともに思い出されます。それからずいぶんと時が経ちましたが、結局のところ、国際学部では日本語の問題に真剣にとりくもうという学生が貴重な存在であることは変わらない傾向のようです。毎年、多くはありませんが熱心で探究心のある学生と出会えることを、私はとても嬉しいことに思っています。

ところで、私のおこなっている学問は「日本語学」と一般的によばれています。賀茂真淵、本居宣長などの国学の流れも汲んでおり、以前は「国語学」とよばれていました。あ

くまでも研究対象は言語運用におかれます。古い時代の言語研究では入手できる資料が限られるため文献研究になることが多いのですが、現代語研究では話し言葉も書き言葉も扱うことができます。私の学問上の専門領域はかなり限定されたものでありますが、現在、宇都宮大学では専門科目の日本語学においては古代語から現代語まで、また、共通語も地域語もとあげています。また、専門科目以外では日本文学や英文読解の授業も担当するなど、かなり超領域的に多様な科目を担当しています。長年狭い専門世界に身を置いてきた私にとって、このような学部の教育方針は当初、驚きに値するものでした。このままの状態では自身の専門がなくなってしまうのではないかという危惧すら覚えたほどでした。しかし、国際学部で6年間教壇にたった今、学部の教育方針に沿って未知の世界に足を踏み入れ、なんとか歩を進めてきたことに感慨に近い気持ちを抱いています。

多様な科目を担当するなかで、隣接異分野の先生方との交流をとおして自身の領域とは異なる視点があることを学び、刺激を受けたことは物事を考えるうえで大変貴重な経験となりました。また、専門科目だけでは出会わなかったと思われる多様な志向をもった学生たちとの交流をとおして学ぶことは多く、心の支えにもなっています。これからも、様々な出会いを楽しみに、一層の研鑽を積んでいきたいと思えます。

(2013年5月3日原稿受理)

博士録 19 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第19回目には [スバゴジョエフ・アセリ](#)さんと[趙無忌](#)さんにお願ひしました。

氏名：[スバゴジョエフ・アセリ](#)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際文化研究専攻

専門：一般言語学

所属研究室：吉田一彦研究室

趣味：読書、料理作り

研究テーマ：「進行アスペクトテンスに関わる日本語とキルギス語の対照研究」

自己紹介：はじめまして。キルギス共和国出身のアセリ・スバゴジョエフです。私はキルギスの国立大学で日本語の教師として働いていました。学生時代から日本に留学したいと思っていましたが、大学卒業後7年目、日本文部科学省のプログラムに合格して2010年宇都宮大学に留学できました。そして本大学国際学研究科国際文化専攻の修士課程を得て、博士後期課程に進むことといたしました。修士論文で日本語とキルギス語の補助動詞の対照研究に取り組みました。同じ膠着語である両言語の直接の対応関係を調べることによってキルギス人の日本語学習と日本人のキルギス語学習は、今までよりずっと効率の良いものになると考えています。

キルギスでは国語はキルギス語、公用語はロシア語なので、日本語教育はロシア語で行われることが多いです。私の関心はアスペクトの研究で、指導教員である吉田先生のご指

導を受けながらキルギス語と日本語とロシア語を三角形の頂点に置いて、比較対照する予定です。

知求会の皆様のご指導をよろしくお願い申し上げます。

(2013年4月20日原稿受理)

氏名：趙無忌 (チョウ ムキ)

出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際文化研究専攻

専門：言語学

所属研究室：佐々木一隆研究室

趣味：旅行、読書

研究テーマ：認知言語学から見た中日空間辞の語義と機能拡張に関する対照研究

自己紹介：

中国雲南省出身の趙無忌です。2009年交換留学生として宇都宮大学に来ました。博士前期課程で、日中両言語における空間語彙の多義性に関する研究に取り組みました。現在は、佐々木一隆研究室で言語学を研究しています。

私は言語を一つの「学」として研究すればするほど、言語研究の難しさを感じてきました。言語研究の理想像が一体どういうことであるかを常に自分に問い続けています。言語現象を分析するとき、研究者自身の容認性判断に頼らなければ展開できないが、錯覚の罠に落ちかねない恐れがあります。数学や物理学のように実証的な言語分析を行い、「内省の甘さ」を排除するのが可能に見えるが、詳しいデータを集めても、定量的な証拠から判断できないところが少なくありません。内観的な考究と実証的な分析がコラボレートできるか、もしできれば、如何に両者を見事にコラボレートするかといった問題を、今後三四年の間にしっかり考えていきます。

(2013年4月23日原稿受理)

博士録 20 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 20 回目には [蔡佳樹](#) さんをお願いしました。

084604A 蔡佳樹

論文題目：日文中訳における連体修飾構造の取り扱いに関する研究

—台湾人訳者の問題点を中心として—

論文の要旨

本研究は、連体修飾構造の特徴によって不適訳につながりやすい「長い連体修飾節の理解」と「並列構造の分析・把握」、「重層構造の分析・把握」、「連体修飾節の文法機能の理解」の4項目に分けて、翻訳試行で集めた台湾人訳者の訳例を対象に連体修飾構造の取り扱いに起因する問題点を考察した。さらに、考察結果に基づき、翻訳上の問題点を生じる原因とその背景を解明した上で、翻訳教育および外国語としての日本

語教育の改善に向けた提言をする。

訳例考察の結果から、4種類の翻訳問題は次のような不適訳が生じる仕組みがあると分かった。

「長い連体修飾節の理解」では 1) 原文の構造に沿って直訳してしまう、2) 文中に挟まれる長い形式に原文の理解を妨げられる、3) 主語を特定できないため全体の意味関係を誤解する、4) 原文の区切るべき箇所を把握できない、5) 原文理解に必要な助詞の機能を把握できない、6) 常識や固定観念が正確な原文理解を阻害する、などの6つである。

「並列構造の分析・把握」では 1) 中国語の文型構成と表現習慣に合致した型式に訳出していない、2) 並列関係を示す成分を見落とす、3) 複雑な連体修飾構造が障害になり並列関係に対応した翻訳ができなくなる、4) 並列構造と外部成分の関係を見落とす、5) 並列関係を言い表すための翻訳手法を活用できない、など5つの問題点がある。

「重層構造の分析・把握」では 1) 連体修飾構造が長く複雑になると、文の構成要素間の関係を正確に捉えることが困難になる、2) 受身表現や文語表現などが理解を妨げる、3) 意味的まとまりに区切る手法を活用できない、4) 動作主と動作を表わす名詞句と動詞との間に介在する言語形式が長く、含まれる情報が多いと、重層関係を見落としてしまう、5) 重層構造を言い表すための翻訳手法を活用できない、など5つの原因が考えられる。

「連体修飾節の文法機能の理解」では 1) 動作主や被動者を特定する文中成分を把握できない、2) 助詞の機能を見落とす、3) 被修飾部が形式名詞である場合、連体修飾構造を捉えることが困難になる、4) 文法知識が欠如しているため、連体修飾の基本構造を把握できない、などの4つである。

以上の考察結果にもとづき、翻訳教育と日本語教育における連体修飾構造の習得について提言した。

翻訳教育において、1) 意味のまとまりに区切る手法の習得と実践、2) 動作主と被動者の特定と訳文における提示、3) 対応可能な文型構成の分析力向上に向けた練習の充実化、4) 連体修飾構造の範囲外の成分の働きに対する理解力の向上、5) 加訳や減訳、倒訳、変訳、直訳などの手法の活用、など5つの項目について実践の方法を提案した。

日本語教育において、1) 連体修飾構造の分析力向上に向けた練習の充実化、2) 連体修飾構造に働きかける成分に対する分析力の向上、3) 文法機能の理解力を高めるための実践、など3つの方面に分けて実践の指導法を提案した。

また、考察を通じて新たに発見した取り扱い法がある。長い連体修飾構造を取り扱うとき、その中に含まれる短い連体修飾構造の被修飾部が文全体の根幹に当たる層の主語ではない場合、直訳しても良いという手法と、並列構造を示す機能語を特定してから対応する中国語の表現で直接に訳出する手法である。一方、新たに確認したこと

に関し、重層構造の不適訳を招きやすいものは層別によるのではなく、各層にある当該連体修飾構造が他層にある連体修飾構造や重層構造全体との関連性の複雑さによるのであるということと、連体修飾構造に直接関わる成分も連体修飾構造の意味関係の一部だと見なし同時に処理すべきだということである。

後輩への助言

本論文が完成を迎えられたことは、宇都宮大学国際学研究科の吉田一彦先生、松金公正先生、中村真先生、佐々木一隆先生、高際澄雄先生など、多くの先生方のご指導のおかげです。この場を借りて深く感謝の意を表します。

論文の執筆にあたり、最も深く実感したことは、作業が予想より膨大で時間も手間もかかることです。3年の時間があるとは言え、予備論文を提出するまで実際に執筆作業に使えるのは約2年間だけなのです。論文を執筆しながら、あれも調べなきゃ、これの考察がないと論述が成立できない、など予想外の課題がたくさん出てくるのです。結局、対応しきれない作業が多くてあっという間に締め切りです。したがって、論文の執筆はできるだけ早めに着手したほうが良い。そして、先行研究や参考資料などを何でもかんでも準備できたという用意万端の日が絶対に来ないから、とにかく書き始めれば良い、毎日コツコツと進めていけば良い。

もちろん、自分一人の見解だけで論文を書いてしまうわけには行きません。指導教員たちと十分な意見交換をした上で、論述の内容を確認すべきです。論文を書くにあたり、きっと行き詰まりがあります。そんな時、自分一人で悩むより人の知恵を借りて行き詰まりを打開したほうが効率的です。特に、宇都宮大学国際学研究科博士後期課程の特徴の一つは、国際社会・国際文化・国際交流からそれぞれ一人の先生が指導教員になってくださることです。せっかくの機会ですので、異なった視点での意見を仰ぎ助言を求めないともったいないです。先生方と意見交換をしているうちに、自分の考えていない論述の方向性や、気付いていない問題点を発見できるかもしれません。

博士論文の執筆は大変ですけど、提出した後も達成感が得られる。皆さんも、悔いのない博士課程になるように、今からきちんと執筆の予定を立ててゴールを目指して頑張りましょう。

(2013年3月23日原稿受理)

知究人 23 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回は投稿者を確保できませんでした。

海外だより 16 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外在住者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

海外留学今昔 09 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。今回は、アメリカに留学した**菊地美沙**さんをお願いしました。入稿がありませんので、次号以降に掲載していきます。

キャリア指南 10 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。第 10 回目には田巻研究室 OG の**高田知佳**さんをお願いしました。

「微笑みの国で学んだこと」

enjin Asia Co., Ltd. 高田 知佳

タイとの出会いは、高校時代の交換留学でした。タイに到着した翌日から、訳も分からずにタイの学生のクラスにぽつんと一人。そんな心細さをかき消したのは彼女たちの「笑顔」でした。当時言葉が一切分からない私は、そんな彼女たちに「笑顔」でいることを心がけ、受け入れてくれる彼女たちに応えようと必死でした。生まれて初めて頬の筋肉痛というのも経験しました。

宇都宮大学在学中には、提携校カセサート大学に再度留学をしました。当時もたくさんの方々から「笑顔」を頂いたことは今でも鮮明に覚えております。

大学卒業後、約 7 年の在京タイ王国大使館勤務を経て、現在タイ王国バンコク都で企業設立支援や PR 事業などの企業支援に関係するお仕事（enjin Asia Co., Ltd. 代表取締役社長）をしております。もはや、私自身タイとは切っても切れない関係となりました。

さて、話は少しタイから離れますが、私自身、日本でチアダンスを習っていたことがありました。チアとはご存知のように「人を元気づける」「人を勇気づける」という意味があり、ダンサーたちは終始「笑顔」でなければならないことは基本中の基本でした。振りが難しくても息が切れても笑顔だけは消えてはいけませんでした。

「笑顔」が私たちに与える影響とはいったい何なのでしょう。私は以前、人間の「笑顔」について少し調べたことがありました。ある本から学んだことは、意識的に作った「笑顔」でも、口角を上げると脳が「楽しい」と認識して辛さが軽減するということ。そして人間関係にも大きな効果があるということ。「笑顔のあるところには人が集まり、明るい雰囲気を作る」・・・確かにそうかも知れません。

「笑顔」は人種・民族を問わず、どんな人間にも備わったもので、そこには「安心」「承認」「感謝」「安らぎ」などがあり、人間関係を安全でプラスにつなぐ方向で役立っています。人は物事を判断するとき、8割以上は視覚で判断するそうです。つまり、普段の「笑顔」率が高いかどうかで、周りに与える印象がだいぶ変わってくるということです。

タイでは「鬱」や「ひきこもり」のようなマイナスワードを聞いたことがありません。これは「笑顔」から生まれるパワーで活気に溢れているのだと信じてやみません。

私たちはどこの土地にいても、誰と過ごしていても、生まれてから人生を終えるまで多くの人たちと共に生活をしていくものです。どんな環境であっても、人生は「楽しく」あって欲しいものです。少し意識的に「笑顔」を増やしていったらいいでしょうか。これから社会に出る不安のある方、自信を失いかけている方、自ら発信する「笑顔」から、世界の見え方、感じ方が変わってくるかも知れません。

「微笑みの国」タイ。この土地で学んだことは「笑顔の大切さ」です。私自身これまでたくさんの「笑顔」に助けられてきました。そしてこれからもたくさんの「笑顔」と出会っていききたいという期待と共に、自分の「笑顔」でも周りの方たちを勇気づけていけたらいいなと思っています。

(2013年4月24日原稿受理)

(国際学部 国際社会学科 2004年9月卒業生)

フォーラム 2013年の皐月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)今回は寄稿が見つからず未掲載になります。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回は、支部長の都合により未発行です。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@yahogroups.jp
